

カナダの高校の教員兼コーチの全国実態調査

小野卓志*・山口 香*

National Survey of Canadian High School Teacher – Coaches: National Report

ONO Takashi*, YAMAGUCHI Kaori*

1. カナダの調査を紹介する理由

部活指導の教員の負担を軽減しようとする動きは2015年の中教審の答申にも盛り込まれ、2017年4月から「部活指導員」を外部から学校職員として雇用することができるようになった。それまでも部活動指導を担う日本の教員の長時間勤務は国際的に比較しても高く、OECD国際教員指導環境調査の結果では調査参加国の平均値の3倍にもなることが報告されている¹⁾。このため、スポーツ庁は本年5月から「部活動のあり方に関する総合的なガイドライン作成検討会議」を立ち上げ、指導法も含む今後の部活動のあり方について本格的な検討を始めた。

本稿では、2015年に発表されたカナダの高校スポーツクラブ指導者の全国実態調査²⁾の要約を紹介する。その理由は、カナダは日本と同様に高校スポーツチームの指導を教員がボランティアでコーチをし、教員兼コーチという二重の役割を担っているケースが多い。University of OttawaのDr. Martin Camiréは2年間の公的研究助成金により、カナダの高校教員兼コーチの現状について2つの調査研究を行った^{3,4)}。これら2つの調査研究の要点がSchool Sport Canadaの報告書に紹介されている。海外において教員がコーチを兼務するという日本に近いシステムの事例は少なく、さらに、このことの利点と難点についての調査研究も極めて少ない。先述したように、日本において新たな部活動のあり方、特に教師が指導者を兼務することによる課題について検討が進められている中で、ここで紹介するカナダの調査研究が参考になるのではないかと考えた。

尚、カナダの調査研究原文には教員兼コーチをteacher-coachと、生徒兼アスリートをstudent-athleteとしているが、本稿では、これ以降、教員兼コーチ

をコーチ、生徒兼アスリートを選手とする。

この調査研究を紹介するにあたっては、Dr. Martin Camiréにメールにて許可を求め、承諾を得た。

2. 調査研究1の要約

2.1 序文

青年育成研究を続けている中で、若者の育成には周辺に関わる大人が影響を与えていることが明らかになってきているが、多くの研究は教員とコーチというそれぞれの役割が与える影響などについてのものではなかった。しかしながら、実際は、教員とコーチの両方の役割を担っている者が多いことから、教員兼コーチに焦点をあてて研究する必要があると考えた。

2.2 研究の方法

調査実施期間は2013年5-6月であった。

調査は、オタワ大学研究倫理審査委員会の承認を得て行われた。面接調査対象者は、25名のコーチ(男20、女5)で、教員経験は平均11.4年、コーチ経験は平均11.1年であった。指導経験のある種目は、バレーボールが16名と最も多く、次いでバスケットボールが13名であり、21名が複数の種目、20名が男女の指導経験を有していた。

面接は、以下の5つの項目について非構造化面接法で、一人約60分行われた。

会話は録音され、録音されたプロトコルはテーマ分析法でまとめられた。

<質問項目>

- 1) 教員として教えたり、コーチをする動機
- 2) コーチをしているときの狙いや方法
- 3) 教員とコーチの二重役割をどのように理解し、生徒であり選手との関係をどのように作っているか

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

るか。

- 4) 教員がコーチを兼ねていることの利点
- 5) 教員がコーチを兼ねていることの問題点

2.3 結果

2.3.1 教員がコーチを兼ねる利点や関係性の構築

1) 教員がコーチを兼ねる利点や強み

- ・教員がコーチを兼ねることは選手との関係づくりに好影響を与えている。
- ・教室外でのふれ合いやスポーツ指導などが信頼性を高めた。
- ・教員とコーチという二重の役割は生徒（選手）との関係づくりを促進している。その理由の一部は、コーチも選手も自由意思で学校スポーツに参加しており、そのことが内発的動機づけを高め、ポジティブな動機づけの雰囲気をつくりだすと考えられる。
- ・スポーツの場においては、より打ち解けた、心を許す状況をつくり出せる。
- ・スポーツ場面は、教室よりも個人的な関係を築ける。

2) コーチが選手との関係をつくるために用いている教育的方法

- ・コーチは、選手の能力に関わらず、すべての選手と接触し、スポーツに関連したこと以外でも話をする。
- ・スポーツの場面では、コーチは権威的役割をできるだけ少なくしようとしていた。その方法は、選手を意思決定に参加させることや、コーチングの方針の理論的根拠を説明する、などである。
- ・シーズン前のチーム・ミーティング、チーム・ディナーや、選手に自分たちのパフォーマンスを反省する機会を与えるために教室での集会を持つことなどが重要であると考えていた。

3) コーチと選手の関係性が向上した結果、得られたポジティブな成果

- ・スポーツ場面での生徒との関わりが教室での生徒理解にもつながった（問題行動の指導など）。
- ・教員としての業務の満足感に貢献した。
- ・教員とコーチという二重役割において自分の自己同一性を、教員であると捉えるよりも教員兼コーチであると捉えている者が多かった。
- ・コーチは選手の個人的な生活（両親の離婚、薬物乱用、自殺念慮などの問題）についても援助できるようになった。

2.3.2 コーチの直面する困難点とそれらに対する解決案

1) コーチが直面する困難

コーチが直面する困難な点としては、時間の問題、管理の仕事、同僚との関係、運営などがあつた。時間の問題は、コーチに時間をつぎ込むとプライベートな時間（家族との時間など）が無くなること、過労による健康障害の危険などがあげられた。管理の仕事では、トーナメントの申し込みなどの大量な書類作成などがあつた。また、管理や運営がストレスの原因となつていた。同僚との関係では、課外活動を担当していない教員が、大会の引率で欠席した授業の埋め合わせを嫌がつて文句を言われるというようなことがあつた。また、自分の指導する選手が他の教員のクラスで不品行な振る舞いをした場合の対処を頼まれることであつた。

2) コーチが直面する困難を軽減する方法

コーチが直面する困難を軽減するための方法として、以下のような意見がだされた。

- ・授業時間の負担軽減
- ・管理業務の軽減、管理助手を雇う
- ・スポーツ活動をカリキュラムに組み入れる
- ・オンラインプログラムや研修日を効果的に活用することによって National Coaching Certification Program (NCCP：コーチング国家資格取得プログラム) の教育を受けやすくなる
- ・保護者の援助など
- ・金銭的報酬…これについては、一部のコーチは金銭的報酬を望んだが、多くの者は、そのことが選手によくはない影響を与えると考えていた。理由は、スポーツに対する純粋な情熱のない人が参加することによって選手のスポーツ経験の質が損なわれる、というものであつた。

ここまですが報告書の調査研究1で、全国調査に入る前の予備調査であつた。これらの面接と質的分析を通して、問題の所在を明らかにし、どのような調査をすべきかを検討し、質問紙が作成された。その後、3,500名の全国調査、統計分析へと進み、その結果が調査研究2で報告された。

3. 調査研究2の要約

3.1 研究の方法

調査研究1の結果から全国調査のための質問紙が作成され、インターネットを利用してデータの収集が行われた。

調査対象者は以下の条件を満たす者とした。

- (a) 2014 - 2015 年の間、専任教員であった
- (b) 2014 - 2015 年の間、高校のスポーツチームのヘッドコーチあるいはアシスタント・コーチであった
- (c) 教員として最低 1 年間の経験を有する
- (d) 高校のコーチとして最低 1 年間の経験を有する

3.1.1 質問紙の構成

1) 人口統計的項目

年齢、性、教員経験年数、コーチ経験年数、担当教科、学校生徒数、コーチング・ライセンスの有無

2) 研究 1 の結果から質問項目を作成した (困難な問題や解決方策の提案など)

3) 以下の 3 つの質問紙

・コーチー競技者間の人間関係質問紙 (CART-Q : Jowett & Ntomanis, 2004)

CART-Q (11 項目) では、コーチが自分の感じている選手との関係について 7 段階で評価された。

・教職満足尺度。(TSS : Ho & Au, 2006)

TSS (5 項目) では、教員としての満足度が 5 段階で評価された。

・コーチング効力尺度 高校チーム用。(CES II -HST : Myers et al., 2008)

CES II -HST は、18 項目からなり、「あなたは競技者のパフォーマンスに影響を与える能力をどのくらい持っていますか」といった質問項目が含まれており、4 段階で評価された。

3.1.2 質問紙の回収

質問紙には 2015 年 2 月に 3,357 名が回答し、スクリーニングの結果、3,065 名を有効回答とした。

4. 結果

4.1 人口統計的項目

研究参加者 N = 3065 (男 : 2046, 女 : 998, 他 : 21)

コーチ・ライセンスの有無

男 (有 1536, 無 466, 不明 42)

女 (有 643, 無 319, 不明 36)

コーチの経験年数

男 (M = 14.7, SD = 8.97) 女 (M = 11.5, SD = 8.58)

コーチの経験のある種目数

男 (M = 2.09, SD = 1.11) 女 (M = 2.03, SD = 1.06)

1 週間当たりのコーチ時間

男 (M = 14.5, SD = 7.85) 女 (M = 12.2, SD = 6.66)

コーチのアイデンティティ

教師 602 (男 344, 女 258) 教師兼コーチ 1462 (男 1462, 女 657) コーチ 109 (男 90, 女 19)

4.2 生徒の問題を助けることへの自信

教員とコーチという役割が生徒の問題についての程度、助けることができたかについて男女別の結果が表 1 に示された。平均値の数値が大きい項目はコーチが支援できると感じている自信の程度であり、7 が最大、4 が中央値となる。男女で見ると、いくつかの項目で女性の方が自身の程度が大きいようにも見えるが、明らかに差があるとは言いえない。また、いじめやアルコールの問題は男女ともに支援が可能と考えられる傾向があったが、家庭の問題 (経済、離婚、虐待など) の支援には自信が持てない傾向であった。

表 1 生徒の問題を助けることへ自信 (7 段階評価)

問題の種類	性別	M	SD
アルコール・薬物問題	男	5.32	1.37
	女	5.23	1.45
異性問題	男	4.91	1.44
	女	5.24	1.41
いじめ (ネットも含む)	男	5.29	1.34
	女	5.28	1.39
経済的問題	男	4.62	1.55
	女	4.71	1.57
両親のアルコール・薬物依存	男	4.63	1.53
	女	4.73	1.53
両親の離婚・別居	男	4.75	1.52
	女	4.94	1.46
身体的・性的・情緒的虐待	男	4.55	1.57
	女	4.75	1.51
自己尊厳・自信喪失	男	5.65	1.25
	女	5.75	1.22
自殺傾向	男	4.58	1.59
	女	4.77	1.54
望まない妊娠	男	4.16	1.71
	女	4.61	1.63

N=2740

4.3 コーチの直面する問題の困難度

高校のコーチとして直面する問題の困難について、どの程度困難と感じているかを 7 段階で評定した結果を表 2 に示した。

問題点を困難と感じているコーチの比率を年別に集計した結果をみると、いくつかの特徴がみられた。分散分析は行われていないが、その特徴をいくつか紹介する。「教室でのしつけの援助を頼まれる」ことを困難と感じたコーチは 20 歳台では 59.1% であったが、40 歳台では 70.0% であった。「両親の対応」を困難と感じるものは 20 歳台では 92.4% と最も多く、50 歳台では 84.4% となっている。「自分の時間管理」については 20 ~ 40 歳台ではいずれも 90% 以上の高い比率を示すが、50 歳台になると 87.9% と若干の低下を示した。このことは管理職などに昇進した 50 歳台のものの方が自分の裁量で時間をやりくりできる程度が高くなることを意味しているのかもしれない。

表2 直面する問題の困難度 (7段階評価)

問題(困難)	性別	Yes%	M		SD	
			男	女	男	女
教室でのしつけの援助を頼まれる	男	71.9	5.03	1.74		
	女	60.4	4.83	1.90		
地域のスポーツ・クラブとの競争	男	66.1	5.08	1.86		
	女	59.9	4.88	1.96		
「スポーツスクール」との競争	男	66.7	5.14	1.85		
	女	63.0	4.96	2.00		
あなたのチームから生徒を除籍する	男	78.4	5.14	1.79		
	女	79.8	5.28	1.69		
普通の生徒より秀でている生徒の扱い	男	85.8	5.17	1.58		
	女	87.2	5.20	1.66		
両親の対応	男	86.2	5.00	1.62		
	女	89.6	5.14	1.65		
友達になりたがる生徒の対処	男	75.0	4.24	1.68		
	女	74.7	4.24	1.76		
家族の義務を果たす	男	89.9	5.78	1.43		
	女	89.6	5.82	1.41		
コーチ教育のコースを受ける	男	80.4	4.77	1.68		
	女	79.9	4.82	1.76		
コーチとして認知される	男	80.4	4.64	1.84		
	女	80.5	4.84	1.81		
同僚から支援を受ける	男	84.1	4.67	1.77		
	女	82.0	4.74	1.74		
学校から支援を受ける	男	82.3	4.54	1.91		
	女	82.5	4.69	1.82		
自分の時間管理	男	90.9	5.56	1.47		
	女	92.1	5.58	1.49		
移動手段の確保	男	81.6	5.35	1.65		
	女	85.7	5.47	1.61		
管理業務の処理	男	89.2	5.70	1.40		
	女	89.9	5.72	1.42		

N=2740

(注: スポーツスクール=スポーツ強化校)

4.4 現状の改善案とその有用性と実行可能性

11項目の改善案とその有用性と実行可能性について、7段階で評価したものが表3に示した。

表3 現状の改善案とその有用性と実行可能性 (7段階評価)

コーチから提案された改善案	性別	有用性		実現可能性	
		M	SD	M	SD
コーチングの時間に対する時間的埋め合わせ	男	5.93	1.62	3.32	2.06
	女	5.99	1.63	2.88	1.98
コーチングの時間に対する金銭的埋め合わせ	男	5.29	1.99	2.48	1.87
	女	5.19	2.09	2.20	1.73
校内にデイケア施設をつくる	男	3.49	2.36	2.55	1.94
	女	3.64	2.46	2.33	1.88
管理業務の低減	男	5.33	1.79	3.36	1.82
	女	5.28	1.86	3.01	1.78
管理業務担当者の任命	男	5.60	1.73	3.95	2.02
	女	5.49	1.86	3.65	1.97
教育委員会からの予算の増額	男	5.84	1.60	3.30	1.96
	女	5.78	1.68	3.18	1.87
スポーツを学校のカリキュラムに組み入れる	男	5.49	1.73	3.93	1.95
	女	5.40	1.80	3.80	1.95
コーチ教育を職能開発として認知する	男	6.25	1.28	4.77	1.98
	女	6.24	1.34	4.59	1.91
研修日に学校でコーチ教育のコースを受けられるようにする	男	5.23	1.31	4.48	2.13
	女	6.22	1.37	4.30	2.09
インターネットでコーチ教育を受けられるようにする	男	5.47	1.76	5.28	1.74
	女	5.21	1.99	5.02	1.86
コーチ教育の費用を学校が負担する	男	6.40	1.14	4.45	2.18
	女	6.42	1.28	4.00	2.19

N=2740

4.5 コーチの担当授業分野

コーチの担当授業分野が表4に示した。

表4 コーチの担当授業分野

担当授業分野	人数	%
体育	1137	38.1
芸術 & 社会科	856	28.7
理数工	821	27.5
高校の教員以外	172	5.8

N=2986 (注: 高校教員以外=部活動のみ指導にしている小中学校の教員など)

4.6 担当科目とコーチをした種目数

担当科目別にコーチをした平均種目数が表5に示した。体育の教師のコーチ経験種目数の平均値は他教科のコーチより多く、3種目以上の人でも珍しくはなかった。

表5 担当科目とコーチをした種目数

担当授業分野	M (平均種目数)	SD
体育	2.54	1.17
芸術 & 社会科	1.73	0.90
理数工	1.78	0.92

N=2803

4.7 コーチと競技者間の人間関係

コーチが感じているコーチー競技者間の人間関係がCART-Q (コーチー競技者間人間関係質問紙) (Jowett & Ntoumas, 2004) ⁵⁾ で測定された結果を表6に示した。この質問紙は3つの下位尺度 (関与、親密さ、相補性) で構成されており、7段階で評定され、中央値は4.00である。関係性のスコアはいずれも6.00以上の高得点を示した (表6)。

表6 コーチー競技者間の人間関係下位尺度得点

下位尺度	M	SD
関与	6.01	.98
親密さ	6.09	.94
相補性	6.07	.86
全体平均	6.06	.86

N=2978

4.8 コーチと競技者間の人間関係と二重役割の利点の認識の相関

コーチと競技者間の人間関係と二重役割の利点の認識との相関を表7に示した。コーチの二重役割の利点を認識しているレベルが高いほど、選手との人間関係がよいという結果が得られた。

表7 コーチと競技者間の人間関係と二重役割の利点の認識との相関

二重役割の利点の認識	関与	親密さ	相補性	全体
生徒と多様な状況で接する機会がある	.601	.601	.592	.657
多くの生徒と知り合える	.461	.438	.434	.488
生徒からの高い尊敬を受けられる	.459	.427	.393	.469

N=2935, p > .01

4.9 コーチと他の指導者との比較

教員兼コーチが、地域のコーチ (学校の常勤教員ではないコーチ) や課外活動を指導していない教員をどのように思っているかが表8に示された。全体的に教員とコーチの役割を持っていることが教育的影響力の点で強みがあると認識されていた。

表8 地域のコーチとの比較

地域のコーチと比べてコーチの強み	M	SD
より成熟しており、職業意識を持っている	5.09	1.71
高い行動の基準を示す	5.42	1.64
勝利よりも生徒の成長に重点を置く	5.35	1.55
学校での存在感がある	6.37	1.17
生徒の勉強の進み具合を見守ることができる	6.22	1.28

N=2874

4.10 課外活動を指導していない教員との比較

全体的にみると、コーチは課外活動に携わっていない教員に比べて、彼らの二重役割は、生徒との関係を形成する能力を高めると考えていた。

表9 課外活動を指導していない教師との比較

課外活動を指導していない教員に比べてコーチは・・・	M	SD
より多くの生徒と出会う	6.09	1.32
生徒と意義ある関係を育てられる	5.96	1.39
学校の規則を守らせ、正しい行動をとらせられる	5.72	1.51
学校の成績を上げるよう生徒を動機づけられる	5.60	1.46

N=2874

5. 要約の総括

本稿では、カナダが全国的に行った学校のスポーツクラブにおいて教員がコーチも兼ねている場合に、教員自身はその利点や難点をどのように考えているかなどを調査した論文を紹介した。おそらく日本の教員兼コーチが抱えているであろう問題も多く見られた。コーチと競技者間の人間関係については7段階評定で6.0以上の高得点を示し、日本のいくつかの調査結果よりも高得点であった (cf. 山口 et al., 2015⁶⁾; 川北 et al., 2016⁷⁾)。

教員が運動部のコーチを兼ねるというシステムは日本のシステムに似ているが、生徒が学校以外にどれほどスポーツクラブを利用しているのかなどについては記載がなく、安易に比較検討することは難しい。しかし、教員へのインタビューと3千人を超える調査結果は興味深い。この調査結果を参考にして、今後は日本の教員兼コーチに調査を行い、比較検討して行きたいと考え、準備を進めている。教員が運動部活動のコーチを兼ねるスタイルは、教員

の多忙や専門性などにおいて問題点も多く指摘されるものの、長く日本のスポーツ文化に根ざしたものであり、利点も多いと考えられることから、今後の部活動を考える上では、カナダの調査のように現場の実情を様々な角度や視点から把握していく作業から始めることが求められているように思われる。

引用文献

- 1) 毎日新聞電子版：
<https://mainichi.jp/articles/20170315/ddm/012/100/099000c>
- 2) Camiré, M. & Deal, C.J. (2015) National Survey of Canadian High School Teacher-Coaches : National Report. School Sport Canada.
- 3) Camiré, M. (2015a) Examining high school teacher-coaches' perspective on relationship building with student-athletes. *International Sport Coaching Journal*, 2 (2), 125-136.
- 4) Camiré, M (2015b) Being a teacher-coach in Ontario high schools : Challenges and recommendations. *Revue québécoise de psychologie / PHENEX Journal*, 7 (1), 1-15.
- 5) Jowett, S. and Ntoumanis, N. (2004) The coach-athlete relationship questionnaire (CART-Q) : development and initial validation. *Scand J Med Sci Sports*, 14, 245-257.
- 6) 川北準人・山口香・中瀬雄三・村田洋祐・市村操一 (2016) 学校運動部のコーチの感じているコーチと競技者の人間関係. 東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部—, (23) : 88-92.
- 7) 山口香・岡田弘隆・増地克之・市村操一 (2015) 日本における高校柔道員とコーチ間の人間関係の検討—CART-Qを用いて—. 筑波大学体育系紀要, 38, 59-67.